

選書基準について

- 1、記述が何らかの根拠に基づいていること。根拠が薄い場合にはそれを明示していること。
- 2、学生ほか利用者のニーズに合っていること。
- 3、社会的少数者に対する配慮があること。種々の社会問題を積極的に取り扱っていること。

- ・中央図書館に置いてある分野や他の理系分野の図書館に置いてある分野は選ばない。しかし、基礎系では理学部や薬学部と共通する分野もあるため、分子生物や遺伝子、免疫学、薬理学関連は利用される頻度が高いので、基準に加える。
- ・臨床系では内科学書や外科学書の使用頻度が高いものは個々人で所有していたり、持ち出しが困難な重厚なものは少数に留める。
- ・社会医学系の分野の書籍が極めて少ないので、社会健康医学の専攻分野に沿った書籍は置いた方がよい。疫学、医療統計学、医療経済学などの書籍が極めて少ないため、京大の教授が著者となっている書籍くらいは置く。
- ・洋書が少ないが、多くは最新の論文で内容を確認するため、学部生の基礎的な学習に利用できる程度の洋書を配置する。
- ・国家試験対策用の書籍は従来通りで、多くの学部生が所有しているような試験対策本は増やす必要はない。

- ・選書基準の一つとして京大関係者の著書、関係資料というのを入れたいです。
- ・附属図書館にあって医学図書館にはない、はばひろく一般向けの医学書籍（文庫・新書など）というのにも必要かと思います。

- ・最新の情報や学説や理論が載っている。
- ・写真や図版・図解、イラストなどが載っていて読みやすい工夫がなされている。
- ・目次、索引、参考文献が載っている。

- ・できるだけ幅広いテーマのものを多様に収集する
- ・情報が正確で、誤った記述がされていないこと
- ・最新の情報や学説や理論を幅広く取り入れていること
- ・類書の少ないものは優先的に選書する
- ・目次、索引、参考文献が用意されていること
- ・学生の要望も考慮に入れる
- ・医学・医療・介護・倫理・科学等の関連各分野において、深い示唆に富み新たな知見を与えうる書籍は専門書に限らず新書・エッセイ・小説も考慮に入れる

- ・現在だけでなく、将来的にも医学生および医学を学ぶ人にとって役立つ図書であること。
- ・医学図書館に既に所蔵されているもの、および他の図書館・室のほうが所蔵するにふさわしい図書は除く。